

氏 名	あ だち けい こ 安 達 敬 子
学位(専攻分野)	博 士 (文 学)
学 位 記 番 号	論 文 博 第 498 号
学位授与の日付	平 成 17 年 11 月 24 日
学位授与の要件	学 位 規 則 第 4 条 第 2 項 該 当
学位論文題目	源氏世界の文学

論文調査委員 (主 査) 教 授 大 谷 雅 夫 教 授 木 田 章 義 助教授 島 崎 健

論 文 内 容 の 要 旨

本論文は、平安時代後期から室町期にかけての『源氏物語』享受の問題を、「源氏世界」という観点から考察したものである。本論文のタイトルである「源氏世界の文学」とは、「源氏物語」という概念を母胎として生みだされた文学を指す。それは、単にその表現や内容が『源氏物語』の影響下にあるという作品にとどまらず、後代の文芸が『源氏物語』をいかなる姿勢で以て受けとめ、いかなる形で自らの内部に再構築しようとしたか、といった意識のあり方自体を、その内部に含むものであった。

表現の具体的なかたちのみならず、作品を支える意識—換言すれば『源氏物語』への態度そのもの—が、享受と創作の往還運動の中で変容を遂げ増殖しながら再生産を繰り返し、時代ごとに新たな「源氏世界」が形成されていく。本論文は、その具体的様相を、以下、実証的に論証するものである。

本論文は次の三部から成る。

- 一、揺籃と桎梏 —物語
- 二、古典化と転生 —梗概書と連歌
- 三、源氏の残照 —御伽草子

第一部は、四編の論によって構成される。『源氏物語』の文学的達成は、それ以後の物語文学に可能性と抑圧を同時にもたらした。以後の物語は、こうした『源氏物語』の二つの遺産に対してどのように対応し、また超克しようとしたのか。

まず、従来、作り物語の弱点と見なされていた「そらごと」つまり虚構性・伝奇性への非難は、日本紀や漢籍の深い素養に基き透徹したリアリティーを獲得した『源氏物語』によって一掃された。そのうえで、『狭衣物語』は、『源氏物語』に全面的に依拠しその權威を利用しながら、物語というジャンルの特質である虚構、伝奇性を最大限に活用しつつ、人工的で完璧な「物語的虚構世界」を創造しようとした。そして、人物造型において、『源氏物語』の問題提起を発展させた主人公を登場させることによって、後期物語中において『源氏物語』の正統の後継者たらしめたのであった。しかし、主人公たる条件の絶対性を追求したあまり、『狭衣物語』は物語を動かすダイナミズムを失う結果となった。それは、『源氏物語』をひたすら賛仰しその驥尾に付そうとした、後の擬古物語の行く末を暗示するものであった（後継者の蹉跌—狭衣大将）。

一方、院政期から鎌倉初期にかけて、現行の五十四帖以外に、『源氏物語』の擬作の巻が幾種類か作られた。その一つ「巢守」の復元された内容のうち、琵琶による女性の音楽栄達譚という要素からは、当時の物語読者の嗜好や趣向、時代状況の反映がうかがえるとともに、もとの『源氏物語』に対する独自の理解を看取することができる。こうした擬作の試みは、当時の読者が持った『源氏物語』に対する解釈の一形態という点から非常に興味深いうえに、物語解釈は別の物語創作にどのようなつながるか、また物語読者はいかにして作者に変貌するか等々の問題を考えるための絶好の素材となるであろう（擬作のこころみ—『巢守』論）。

さて、鎌倉期の擬古物語『苔の衣』の『源氏物語』受容の分析からは、余りにも深い『源氏物語』への傾倒と理解が、却って『苔の衣』にとって最も肝要なところと見られる趣向と表現を、そのまま『源氏物語』に依拠させてしまうことが明ら

かになった。これは、『源氏物語』の影響力が、そのまま、後代の物語への拘束と化し、ついには物語の表現行為にとって致命的な陥穽となる可能性を意味している。この点で、『源氏物語』受容は、擬古物語の根源的な創造力に対して、明らかに負の側面を持っているのである（源氏物語という拘束—『苔の衣』・『木幡の時雨』の場合）。

さらに時代の下った室町期には、『源氏物語』は、もはや擬古物語にとって圧迫を感じさせない、物語世界の大前提となるに至る。室町期の擬古物語が、その囲いこまれた範囲の中で、自明の如く『源氏物語』に寄り掛かりながら、如何に物語を創作していったかを、『中宮物語』という小品が端的に示している（室町期の物語的教養—『中宮物語』の世界）。

第二部は、五編の論から成る。平安末期の『源氏物語』の享受方法から生まれた源氏評論書や源氏梗概書が、広く中世和歌や連歌、芸能、御伽草子などにおける源氏受容の生成と変容に、如何に関与したかを論じたものである。

ここでは、様々なジャンルを横断する『源氏物語』享受の様相を総合的に把握するため、「源氏詞」の意味と役割に着目した。「源氏詞」とは、鎌倉期以降、『源氏物語』の特定の場面と、それについての鑑賞批評が不可分に結びついた表現形態を指す。それは、評論書・梗概書・傍流注釈書などを通じて、直接的な『源氏物語』読者以外、広い範囲の中世の人々にとっての、固定化された「源氏物語」イメージの具体的な形となっていた。そして、「源氏詞」が、中世連歌のなかで「源氏寄合」へと発展してゆき、連歌の実作に用いられることで、その内容の再生産を繰り返したのである。しかも、連歌において新たなイメージを付与された「源氏寄合」は、さらに絵画や御伽草子、謡曲などに利用されることによって、連歌の枠組みを越えて、中世文芸全般に遍在する「源氏なるもの」を形成したのである。こうした源氏受容の大衆化の過程を検証する一方で、純正連歌や和歌の世界において原典の表現への回帰という現象が現れたことの意義を、新たな「源氏詞」再生の試みとして評価した。

まず、院政期における物語読者の有り様を具体的に示す『無名草子』の中に、表現と場面と鑑賞批評の三者が一体化された形で享受されていたことが確認されたが、こうした享受方法は単に『無名草子』にとどまらず、以後の和歌稽古や物語評論書などに意識的に用いられていたものであった。ここから生まれた、『源氏物語』の中でも特に愛好された文章表現は、次第に特定され固定化していき、それにともなって、表現に結びついた場面、また批評も同様に固定化した。『源氏物語』を中世の人々が脳裏に浮かべるときには、しばしば一種の名場面集・名文集の形を取ることが、当時の文献からうかがえる。『源氏物語』から題材をとって和歌や早歌、また文章の修辞などがなされる際に、その源泉となる『源氏物語』は実に如上のものであった。このような場合の「源氏」とは、単独で場面や事件の梗概になる「源氏詞」の集大成といっても過言ではない。「源氏詞」こそが、中世の広範な『源氏物語』享受を考察する際、一つの鍵となると考えられるのである（規範としての中世源氏評論書—『無名草子』と後代）・（源氏詞の形成—源氏寄合以前）。

さて、ある場面と表現に与えられた批評は、それについての同時代人の理解を示すと共に、未読の人々にとっては『源氏物語』への手引きの機能も果たすことになる。ついに原典に接することなく終わる読者が大半であった当時、源氏評論書と啓蒙的梗概書や注釈書、女子教訓書の距離は甚だ近いものであった。「源氏詞」には、詩歌や芸能のみならず、より日常的な規範や教養を導くものといった需要もあったのである（啓蒙と注釈—『伊勢源氏十二番女合』の成立基盤）。

かくして、「源氏詞」は、様々な方面から中世の人々の『源氏物語』への回路であったのだが、南北朝期以降、文化の基盤であった連歌において「源氏寄合」として結実することによって、一層影響力を持つことになる。「源氏寄合」は、「源氏詞」をさらに短く凝縮しかつ飛躍させた内容を持つため、新たな誤読や拡大解釈を引き寄せながら、原典から離れて中世的変容を遂げた。そして、連歌人口の爆発的増大にともない、いよいよその影響力の範囲を拡大したのであった。連歌の知識を基盤にした御伽草子・謡曲・芸能・絵画・工芸など、「源氏寄合」の痕跡は中世文化のいたる所に見出すことができる（室町期源氏享受一面—源氏寄合の機能）。

「源氏寄合」による『源氏物語』の大衆化が進展する一方で、十五世紀末より十六世紀初めにかけて、宮中や公家の連歌会においてしばしば「源氏詞連歌」が興行された。文明十四年の「後土御門天皇独吟源氏詞百韻」と大永元年九月十三日の「源氏詞連歌」という百韻二種の本文校訂と「源氏詞」の出典調査により、これら全句に詠み込まれた「源氏詞」（特に後者の百韻）は、従来の固定化されたものではなく原典本文への通曉なしには詠み得ず、また理解できないものばかりであることが明らかになった。従来、連歌用梗概書や「源氏寄合」ばかりに依存する傾向が強かったのに対して、あえてそれとは一線を画そうと意識する『源氏物語』受容のあり方が、この「源氏詞連歌」には見ることができるのである。

「源氏寄合」に依存した間接的享受から原典本文の重視へという転換に、大きな影響を与えたのは宗祇の存在である。宗祇は、連歌の句作において、周知の場面や表現の持つ王朝的情趣に寄りかかるのではなく、普遍的な人間感情のレベルに昇華できる程の、深く精緻な『源氏物語』理解を要求した。源氏取りの手法について、手垢にまみれ通俗化した「源氏寄合」を排除し、原典そのものを味読することから新たな「源氏詞」を発見することを提唱したのである。宗祇の主張は、彼の古典学の権威とともに肖柏や三条西実隆ら弟子達に継承され、少なくとも純正連歌の最前線においては、従来の「源氏寄合」は過去のものとなす。しかし、宗祇の唱えた原典重視も、実は、中世和歌の世界で既に正徹によって、独自に先鞭をつけられていたものであった（室町連歌における原典の受容―「源氏詞連歌」二種）。

第三部においては、四編の論を以て、御伽草子という文学ジャンルに展開された「源氏世界」の種々相を示す。第一部で、『源氏物語』の後継者たるべき物語文学が、その圧倒的な影響力の下でいかに新機軸を打ち出そうとし、それがどのようにジャンルとしての活力と連動していたかを通観した。また、第二部では、主に、中世人に受けとめられた「源氏物語」の姿を、梗概書を通じて析出し、それが「源氏詞」という特殊な表現形式を取りながら文学的営為として、和歌や連歌に如何に表されようとしたかを跡づけた。第三部は、御伽草子の中でも庶民物と呼ばれる、一見古典とは無縁であるかの如き作品群を中心に、そこに見出される、『源氏物語』を初めとする古典文学、また説話や中世神話との関わりを考察する。

六条御息所という著名な登場人物の人物像は、謡曲、歴史物語、説話などの中で、実在した皇妃達のイメージと重なり融合しつつ、「天狗道に墜ちた六条御息所」という独自の解釈として『六条葵上物語』に結実していった。同時に、中世の一般的な妬婦・怨霊としての御息所像が、『平家物語』諸本に見える鉄輪伝説と結びつき、またおそらく和泉式部伝説もとり込んで新たな伝承を生み出し、連歌の注釈や梗概書の中で、『源氏物語』の奇怪な挿話として一時期定着する現象が確認された。これらはともに、六条御息所への理解が、他のジャンルの類似する存在と一体化して、それぞれの方向に中世的変貌を遂げた事例である（六条御息所異聞―人物像の変転）。

鯛売りの恋愛成功譚である『猿源氏草紙』では、主人公の設定と命名において、鯛の女房詞「紫」から『源氏物語』が導き出されることによって、王朝古典が作品成立の大前提となる。そのうえで、この作品は、古歌やその伝承、また仏典中の説話、和歌説話、浄瑠璃十二段草子などを縦横無尽にパロディーとして利用しながら展開していった。そこでは、古典は、権威を付与するものとしてではなく、従来の権威を覆され笑われるために登場することが明らかになる。こうした古典に対する斜に構えた姿勢という点から、おそらく、近世的といってよい知識人がこの作品の作者像として想定される（『猿源氏草紙』の方法―古典のよみかえ）。

「成り上がり」という人々の願望を体現した『文正草子』も、いかにも庶民的な外見とは異なり、その構想の骨格は『源氏物語』の明石君物語の換骨奪胎に他ならなかった。明石君物語は平安期から中世を通じて、子女の玉の輿による一族の繁栄という主題の典型、祝言の代表的なものとして人々に認識されていた。文正の稀有な成り上がりは、明石君物語という万人周知の話型を骨格とすることによって説得力を持つ。そのことは、庶民物とされる『文正草子』の素性について、一見いかに中世的な意匠の装いをまとってしようと、庶民の世界を基盤とする従来の通説に再考を迫ることになるであろう（『文正草子』の成り上がり―明石の物語の射程）。

『文正草子』の改作『別本ふんせう』は、鹿島明神・香取明神の神威を強調することによって、原作の骨格であった明石君物語を、その話型の始源、彦火火出見命神話にまで還元してしまう。中世日本紀において、彦火火出見命神話は、八幡縁起と融合して「珠取りの物語」と呼ぶべき壮大な中世神話と、それに属する様々な説話群を形成する。『別本ふんせう』や原作『文正草子』、そして明石君物語でさえも、全てこの「珠取りの物語」の変奏と見なすことができる。「珠取りの物語」の主題とは、異種の婚姻による新たな家系・王統の始まりであるという。『別本ふんせう』にあっては、文正の娘達との婚姻がもたらしたものは、摂関家と天皇家の新たな再結合であり、聖帝の誕生であった。ここにおいて、庶人の成り上がり譚であったはずの物語は、国家の始源と皇統と摂関家の繁栄と永続を寿いだ神話的世界に変貌する。それを可能にしたのは、神話への通路を繋ぐことのできる古典文学の伝統であった（『別本ふんせう』の構造―神話への回帰）。

論文審査の結果の要旨

『源氏物語』享受の歴史は、擬古物語・和歌連歌・お伽草子・謡曲・歌謡などと、その分野ごとについて、それぞれ別個

に研究がなされる傾向が従来は強かった。長い研究史を通じて、『源氏物語』の構想や表現がどのようにそれらの作品に影響を与えたかが、具体的に、かつ個別に問われ続けてきたのである。そのなかで、本論文は、それらの諸文芸がいかに『源氏物語』を認識したか、それをいかに受容し、また変容してきたかなどを、分野の枠を越えて総合的に把握し、それらの総体を「源氏世界」という新たな概念によって捉え、その「源氏世界」の生成と変遷という観点から中世国文学史をひろく記述しようとする試みである。

全体は三部に分かれる。一部は物語、二部は梗概書と連歌、三部は御伽草子と、『源氏物語』の影響をうける三つの分野の作品群を取りあげる。ただ、その各部は、『源氏物語』享受史論という共通点だけでここに集められているのではなく、それぞれの分野の背景にある「源氏世界」の生成、成長、変質という歴史的展開に関連づけられて、まとめられている。たとえば、第一部で取りあげられている『狭衣物語』以下の物語群は、『源氏物語』をそれぞれの仕方で模倣したものであるが、論者は、『狭衣物語』、散逸物語の「巢守」、あるいは『苔の衣』『中宮物語』といった擬古物語における源氏模倣が、源氏を愛読してそれを独自に解釈したり、あるいは時代の嗜好に応じて偏って理解したことによって生じていることなどを示して、当時の源氏読者の心の中に、『源氏物語』そのものではない、概念としての「源氏世界」というべきものが醸成されつつあったことを具体的に明らかにした。

そして、第二部は、その擬古物語が、あまりにも巨大な『源氏物語』の圧力の下にその物語生成の活力を徐々に枯渇させてゆく一方で、「源氏世界」が物語以外の分野に転生し、中世文芸の豊かで芳醇な母胎となるという見取り図を、「源氏詞」の生成と変容を手がかりにして描いている。鎌倉時代以降、必ずしも『源氏物語』を通読することのない多くの人たちが『源氏物語』の梗概書や評論書を介して物語の名場面や名文章に親しむことにより、『源氏物語』の中でも特に愛好される文章表現が次第に固定化し、それが「源氏詞」として「源氏世界」を成り立たせていた。論者は、物語評論書の『無名草子』や女子教訓書、あるいは連歌寄合書などに見える「源氏詞」の生成と変容のさまを詳細、緻密に分析して、「源氏世界」の表現としての中世文学史の記述に挑み、その試みに見事に成功した。なかでも連歌における「源氏寄合」が、連歌の大衆化にともなって原典たる『源氏物語』から大きな乖離をみせることの指摘、また、それに対する揺り戻しとして、連歌師宗祇を中心として、『源氏物語』の正確な読解にもとづいて「源氏詞連歌」が興行されたことなどの指摘は、従来の文学史研究には全く欠けていたものである。読解の難しい連歌作品の丁寧な分析にもとづいてなされたその論考は、高い学的価値をもつものと言えよう。

第三部の諸論は、一見庶民的な内容の作品と見られがちな御伽草子が、実は、『源氏物語』についての深い知識を前提として、その構想が作られ、表現が展開されていること、すなわち、それもまた「源氏世界」に深く根ざす作品であったという、まことに意外な結論が、きわめて確実に論証されるものであった。

本論文の特色は、何よりも精緻で丁寧なテキストの読解にあるだろう。また、中世における和文のほぼ全ての領域をおさえた広い視野と資料の博搜にも瞠目すべきものがあつた。さらに、全編、源氏物語を踏まえうえでの立論が展開されているが、その前提として、源氏物語そのものの正確な読みと深い理解が存在していることも重要であった。本論文にあきたらない点を、あえて指摘するならば、「源氏世界」を論じる前提として、総論としての『源氏物語』論が見られないこと、また『源氏物語』の影響をもっとも大きく受けたはずの和歌に関する論が欠けることなどが挙げられる。「源氏世界」論のさらなる発展、論者の今後の精進を期待したい。

以上、審査したところにより、本論文は博士（文学）の学位論文として価値あるものと認められる。平成十七年九月十六日、調査委員三名が論文内容とそれに関連した事柄について口頭試問を行った結果、合格と認めた。